

論文

「気」から見る中国の伝統文化

高 明東

目 次

1. はじめに
2. 近代科学の人間研究の特徴
3. 個体レベルの人間研究と気
 - 3-1 気という概念
 - 3-2 気の間観
4. 古代中国の気の社会的運用
 - 4-1 古代の気功——直接的な気の修練
 - 4-2 芸術——気の修養の一つの形式
 - 4-3 望気——気の軍事的利用
 - 4-4 風水——大地の気の「経絡」を測る「技術」
5. 気の本質——中国古代哲学的思考
 - 5-1 気に関する哲学思想
 - 5-2 気の実験の発展
6. おわりに

1. はじめに

1980年から中国では大きな変革が起きた。階級闘争を中心とした路線から改革開放経済建設を中心とした路線へ転換して来た。それと同時に、一つの文化論議のブームが起きた。ここで、注目しておきたいのは、その中の気功ブームという社会現象である。改革開放以来、たくさんの気功組織が出てきて、気功の雑誌、書籍もたくさん出た。気功

の講座・教室が次から次へ開かれている。中国では、一番人気があるサッカーのファンが1500万人しかいない、しかし、気功を学び・練習する人は少なくとも2000万人である*1。長年の難病が数時間の間に徹底治癒されたり、あるいは何らかの超能力を得ることなど、不思議な現象が絶えず出てきた。いろいろな気功大師や超能力者が世の中に出てきた、大学や研究所及び国家の科学研究機構も気功を本格的に研究しはじめた。つまり中国では、気功のブームが起きた。1988年に、「気と人間科学」と題する国際シンポジウムが東京で開かれ、日中双方から多くの人々が参加した。中国側参加者には、気功関係者のほか物理や工学系の科学者が多かったが、日本側からは、哲学・宗教・心理学・医学などの分野の研究者も多く参加した。1990年頃、封建迷信を散布することや気功師の詐欺などで、気功活動が整理された。しかし、その後も気功活動はいろいろな形で続けられている。中国の著名な物理学者銭学森も中国人体科学学会の元理事長として、熱心に気功活動に取り組んでいる。「中国気功科学研究会」が北京に設けられる他に、省、市にもたくさん分会をもっている。

いったい、どういうことであろう。これは封建迷信の復活か、中国伝統医学の新発展かあるいは他の意味があるのか。この社会現象を解明するには、もちろん現代中国社会を分析する必要がある。例えば、中国では、改革開放して以来、社会思想環境がきびしく制限された状態から緩めて、相対的に自由な状態に変わって、いろいろな思想が出てきたためである。あるいは、経済建設を中心として、人々の物質生活がだんだん良くなって、自分自身の健康に注意をしはじめたためである。

しかし、なぜ1980年代に入って、何千年も前に生み出された鍛練方法がはやるのであろうか。今の時代は、近代科学が支配的である、世界の国々は近代科学という列車に乗って、工業社会に連れられてきた。近代科学のおかげで、物質文明が極大となった。しかし、それと同時に、環境汚染、核脅威などいろいろな人類の生存にかかわる大きな問題にぶつかった。こういう限界を越えるために、世界的に人々が思索している。それも気功ブームを大きくするであろう。

気功とは何か？ 気功は健康のために、一種の心と体あるいは精神と肉体を同時に重んじる鍛練方法と見なされている。あるいは、生命エネルギーとしての「気」を増強しコントロールする方法である。そして、気功を一種の人生の実践と見なしている人もいる。中国伝統文化には「気」に関する論述はたくさんあって、そして、現在の気功の具体的な方法には、昔の道教・仏教・儒教などの中からそのまま取り入れたものは少なくない。そのために、気功と言う中国の独特の社会現象は、中国の古代哲学などの伝統文

化の視点から分析しなければその本質がわからないであろう。したがって本研究では、「氣」を切り口として、中国の伝統文化の「氣」に関する思想を概観する。

2. 近代科学の人間研究の特徴

中国伝統文化の氣に関する思想の基本的な内容は、個体的な人間研究である。その特徴を把握するために、近代科学の人間研究と対比するところから、氣の研究に入る。

さて、近代科学の特徴は何であろう。1997年4月から10月までに、横浜みなとみらいで「不思議な人体展—未知な小宇宙—」と言う展示会が開かれている。人体の皮膚の下に何があるか、ドイツの科学者がプラスチックという技術で人体標本を作り出して、皮膚の下の骨・筋肉・血液・リンパ及び神経などの構造、システムを展示し、説明してくれた。こういう技術はドイツしか持たないそうである。現代の人体科学研究は、もちろんこういう解剖学のほかに心理学なども取り入れた総合的な研究がなされているが、それにしても、こうした研究方法はやはり典型的な近代科学の考え方を示している。こうした方法で、見える人体(皮膚の下の部分でも解剖したら目で見える)しか見えない。目で直接に見えないけれども、経絡システムのような組織が実際にあると言う東洋医学の考え方は近代科学では認められにくい。近代科学が入ってきてから、東洋医学が非科学的なものとなされるようになった根本的理由はそこにある。解剖学の方法が精神と物質、または主観と客観をはっきり分ける近代西洋の認識論や人間観およびそれから生まれてきた近代科学の考え方に基づいている。こうした二分法はデカルト以来起きてきたものであるが、デカルトでは、精神と物質、したがって主観と客観ははっきり区別されるばかりでなく、お互いに何の関係もないとされてきたからである。

もう少し厳密に言うと、デカルトは、学問の方法論については、はっきりした二元論をとった。「我思う故に我あり」と言う彼の言葉は有名であるが、これは心の本質は自我意識にあるということを意味する。彼は自我とは「考える存在」であると定義した。つまり意識とは自我の存在の状態である。これに対して物質とは、「空間に一定の容積を占める存在」と定義される。物体は必ず空間の内部に一定の容積を占めて存在している。しかし心は、物理的空間の中に容積をもつものとして見出すことはできない。それは自我によって感じられ、意識されるだけである。したがって、心と物、精神と物質はその性質上ははっきり区別できる。そればかりでなく、心と物質の間には何の関係もない。これがデカルトの考え方である。このような考え方は、二元論と言うよりも、精神と物質をその存在や作用について完全に分離する二分法と言う方が正確である。

この二分法を心身関係に適用すればどうなるであろうか。近代科学は物理学と天文学の革命から始まって、次第に生命科学や医学などの分野に及んで行った。したがって生命体や人体の性質や構造を考えるに当たっても、物理学で確立された実験観察の方法が適用される。このような考え方から、やがて人間機械論とか唯物論の思想が生まれ、人体が物質の集合体、精密な機械とみなされて説明されている。心の問題は無視されたが、しいて考える場合には、心のはたらきは脳における神経活動、あるいは神経伝達物質による生化学的作用を意味するという風に説明される。こういう考え方を還元主義と言う。これには次の二つの意味がある。一つは、現象の全体を部分に還元し、部分の集合として全体を説明する考え方。人体を時計にたとえ、脳をコンピューターにたとえるような考え方はその例である。もう一つは、心の作用や生命現象などをすべて物質の作用に還元して説明する考え方である。医学では、19世紀後半に生まれたパスツール、コッホの細菌学やウィルヒョーの細胞病理学によって、このような考え方の基本方向が定まった。心理学・心身関係の分野にまでこういう還元主義の考え方が及んできたのは今世紀始めごろである。

ところがデカルトは、心身論に関してはこの二分法をとらず、心と身体は不可分に結びついて関係しあっていると考えた。彼のいうところでは、心の作用は脳の松果線で身体と結びつき、動物精気が血管や神経を流れて内臓などの器官に影響を及ぼす。特に喜び、悲しみ、愛、恐れといった感情のはたらきは、心臓や胃腸、血液などのはたらきと深い関係があると彼はいう。このような観察は、現代の心身医学の考え方と基本的な点でよく一致している。しかし、心身結合は学問的根拠のあいまいな日常的経験の現象であり、したがって道德の領域の問題に属する。デカルトは心身の問題についてはこのような考え方に立っていたが、学問的研究の方法としては、厳密な知的二分法をとった。ここに彼の理論的矛盾がある*2。

この二分法と還元主義に対応して、前に述べたように、中国伝統文化は心身統一論や有機体論など別の考え方を持っている。例えば、経絡システムの理論はその一つ具体的な理論である。近年になって、現代の生理学的実験方法によって経絡の機能を明らかにする研究が進んでいるが、近代科学や医学の理論的システムと矛盾なく結びつくまでにはまだ至っていない。

中国伝統文化が具体的にどのような考え方を持っているか、「気」という切り口で概観する。

3. 個体レベルの人間研究と気

3-1 気という概念

「気」という言葉は日本語の中にいろいろな意味があつて、日常生活でよく使われている。「気がつく」、「気がきく」、「気になる」、「気が短い」、「意気」などは心理的側面に使われている「気」である。「空気」・「磁気」・「気候」・「電気」などは近代科学が生まれてから作られた訳語であり、自然界の物質的な側面に使われている「気」である。そして、「病気」・「気分」・「元気」などは体の生理的状态を表す「気」である。この「気」は中国の辞書にはなく1945年から用いられるようになった日本の教育漢字である。中国の「气」という字を考察すれば、中国の文字が一番古く記載されている甲骨文字までさかのぼる必要がある。甲骨文字では、「氣」が数字の「三」に似た形で書かれている。その後の青銅文字にも同じように書かれている。そして、戦国初期（BC4世紀）のものとされる玉製の柄があり、12行、45字が刻まれている。「氣を行かせ、実すれば」という文章の中に、注目すべき「氣」があり、それは「行気」つまり気功の習練である。漢の時代（10世紀頃）の辞典『説文解字』では、漢字を系統的に整理し、言語学的に研究した労作である。「气とは、雲気のことなり。象形。氣とは、客に芻米を饋るなり。米に従う气の声」氣とは客に出す米のことで、形声文字であり、意味は「米」から、発音は「气」からなりたっている*3。

漢字としての「气」は変化してきたが、その意味もいろいろある。中国伝統文化を理解するには、「気」の理解なしには不可能と考える。

「気」とは、中国伝統文化にはどのように使われているのか、まず、個体レベルの人間研究の方に見てみよう。

3-2 「気」の人間観

個体レベルの人間研究では、前に述べた人間の身体の経絡システムを考察する必要がある。経絡システムは中国の医学、中国伝統文化にしかない文化成果である。秦の始皇帝の名前は万里の長城とともに、世界的な知名度をもっているであろう。彼は全国を統一した後、分封制を廃止し、中央集権的な郡県制を建設した。そして、度量衡や貨幣、文字などを全国的に統一した。このような偉大な事業を行うと同時に、人々の思想を統制するために危険思想とみなされた道徳、政治などの書物を焼き払い、危険思想の持ち主とされた儒学者を生き埋めにしたのであった。しかし、哲学の思想を含む医学書、占いや農業の本は例外として、暴政から逃がれた。そこで経絡システムの理論がその中の

最も古い医学の経典『黄帝内経』や『難経』の中に書かれている。

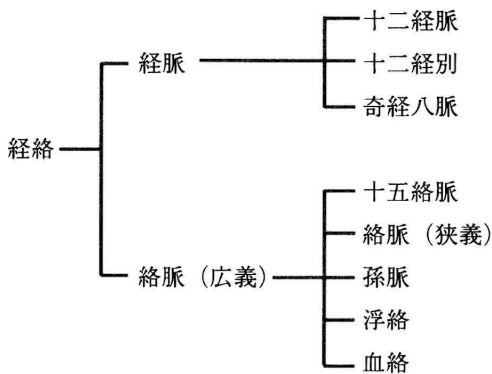
黄帝は中国の伝説の三皇五帝のひとりであり、黄河文明のシンボルともいえるべき存在であり、中国人（漢民族）の精神の支柱である。現存する最古の医学書に黄帝の名が冠せられていることは、それなりの理由があるということだ。ただ、その『黄帝内経』の作者と時代はまだ未確定のままである。一般的な見方は、『黄帝内経』の内容が春秋時代からの「気」の思想をうけつぎ、人体を対象として深化させたということである。思想史の流れからみれば、『黄帝内経』は戦国時代（BC5世紀～BC3世紀）から書き始められ、秦をへて前漢までに完成したと考えられる。

『黄帝内経』は体内における「気」の運行を主に書いた『靈樞』と生理学的な内容に重点をおいた『素問』の2篇から構成されている。その内容は広範囲に及び、医学の基礎理論から臨床診断治療の基本まで議論しないところはない。それによって中医学理論の骨組を確立した。今日に至るまでに中医学理論は大きな発展があり、『黄帝内経』によって構想された中医学理論の体系の骨組に充実と発展が見られるが、基本は『黄帝内経』の理論体系を越えてはいない。それ故に、『黄帝内経』が完成したことは、中医学理論体系の基本を確立した象徴である。『難経』はまたその名を『黄帝八十一難経』といい、『黄帝内経』の後を継ぐもう一冊の重要な医学理論の著作である。全書は八十一難に分かれる。完成された時期は考証することができないが、ある者は秦漢の替わり目であると主張し、また後漢末期とする者もある。春秋戦国時代の名医で望診（透視術ともいわれる）と脈診に長じて針・毒慰（一種の温湿布）・薬酒などの医療を行っていた扁鵲の著という説もある。『難経』は脈学・経絡・臓腑・病気の変化及び病後・五輪穴・針刺手法などの問題を論述している。その理論は『黄帝内経』に本源があるが、『黄帝内経』の理論に対して、さらに発展したところがある。すなわち、「命門」の一説を提出、これは三焦元気の理論にとって重要な影響をもたらした。それが中医学理論体系確立のために多大な貢献をしたので、後世、常に「内」、『難』の二書を並び称している*4。

一般には中医学は解剖学を無視してきたという見方が多いが、『黄帝内経』の『靈樞』篇に「死んだ後は解剖して観察することができる」と記されている。秦の有名な医師俞府、三国時代の名医華佗などは麻酔を用いた外科手術を行ったことがある*5。それゆえに、古代中国では、解剖の医術もあった。ただし、このような解剖の医術は次第に後退してゆき、その代わりに、気の運動と経絡の考え方を基本とする方向へ発展して行ったのである。その理由は、中国伝統文化の特質に大きくかかわると思う。それについて、「5-2」のところを参考すること。

『内』『難』二書の最大の特徴は、「気」の医学を完成させたことである。世界は「気」によって構成されているので、人もまた「気」によって構成されている。「気」の運動によって、自然界に変化が起こり、また人の生命活動も引き起こされる。「気」によって正常な生命活動を維持し、「気」の正常さを失った運動では、正常な生命活動を維持することができない。したがって疾病の発生を引き起こし、死に到る。故に『素問』は「百病は気より生ずるなり」と説いている。そして、『内』『難』二書は体内をめぐる「気」の流れとしての経絡と「気」の重要ポイントとしての穴(つば)が全身のすみずみまでにわたっている、いわゆる、経絡システムであることを解説している。

経絡システム学説は中医学の基本的な考え方であるので、ここでもう少し具体的に説明しよう。「経絡」という言葉は経脈と絡脈の総称で経脈は幹線、絡脈はそれから分岐する支線である。絡脈からさらに細かく分岐するルートとして孫脈がある。孫脈はいわば、血管末端の毛細血管のようなものである。「経絡」はこれらの総称である。



図・経絡の分類*6

主要な経脈(正経)は12本あって、頭部または内臓諸器官と手足の末端を結ぶ回路である。このシステムは、解剖学で知られている器官系や神経系とはまったく違った性質のもので、解剖によって認知できるような脈管組織をもっていないため、近代科学の見地からはその存在が疑問視されてきたものである。そして、奇経とよばれる八つの経脈は気のエネルギーの貯水池にたとえられるもので、武術で重要視されている。瞑想法では奇経のうち、脊柱にそった督脈と胸腹部の正中線にそった任脈を重要視する。

十二正経及び八つの奇経は陰と陽のグループに大別され、背面や手足の外側を通る経

絡は陽、腹部や手足の内側を通るものは陰の経絡とされる。各経絡には特定の内臓の名(例えば肺経、心経、など)がついているが、その機能は当の臓器ばかりではなく、他の臓器にも多かれ少なかれ関係している。このような性質をもつ経絡に流れている「気」は生命体の特有のエネルギーであるといえる。そして、穴は——主なものだけでも数百あるが——いわば気のエネルギーが集中している点である。その流れが悪ければ具合がわるくなるので穴への刺針などの刺激によって気の流れを円滑にし、新鮮な気が流れるようにするのが治療法の基本である。

経絡に基づく身体観の一つの特徴は、まずここによくあらわれている。近代医学の見方は、特定の内臓器官が一定の生理的機能を分担するという局所論的な見方をとっているわけであるが、中医学ではホリスティックな観点から全身の機能を統合的にとらえる見方に立っていることが注意をひくのである*7。最も代表的な例は耳針治療法である。つまり、全身のおもな部分の病気がほとんど耳の穴だけの刺針で治療できるという治療法である。経絡は人体の気血の運行の通路、内臓器官の間の連結である。経絡で人体が一つのシステムになっている。さらに、経絡で人体はもっと大きなシステムにつながっている。先にいったように、各経絡の末端は手足の先端になっているが、気の流れは主に、この先端を通じて外界と交流しているものと考えられている。(このため、手足の先端にある各穴は特に「井穴」(せいけつ)と名づけられている。ただし、気は他の穴からも多少は出入りしている。) こういう見方は、身体のはたらきを外界とつながった開放系としてとらえる態度を示している。つまり、身体の基本的機能は生命エネルギーである気を外界から吸収し、あるいは排出するところにある、と考えているわけである。そのために、気功の「体感」(気功師が「見る」だけで人の健康状態を測る)という診断方法が成り立つ。これに対して西洋医学は考え方の順序として身体をいったん外界(環境)から切離し、それを完結した閉鎖系として観察し、その構造をさらに分解してそれぞれの機能をとらえようとする。そこに、機械モデルの人体の見方が生まれてくる。

身体を開放系として見る時、経絡のほかに、身体と宇宙の間は相互感応の方式で人体システムと大きな宇宙システムにつながっている、いわば、「天人感応」学説である。これについては後で分析する。

ここでは、経絡システムはどのように生み出されたかという問題を考えてみよう。実は「気」というものは、誰でも日常普通に感じているわけではないが、気功、瞑想などの鍛練によって「気」を認識し、把握することができる。気功の「小周天運行」というのは、気を「小周天」(任脈と督脈から構成されている循環経路)にそって運行させるとい

うことである。さらに「大周天運行」というのは、気を「大周天」（小周天の他に、十二経脈も含める）にそって運行させるということである。こういうふうと考えたら、気功の修練がきわめて高いレベルに達した人達が、人体の経絡を把握して後世に伝えたことが考えられるであろう。『素問』『上古天真論』に、「上古之人，其知道者，法干陰陽，和干術数」「恬淡虚無」，故に「真気従之」*8（古代の道を知る人は、陰陽の規則と修養のルールに従って、雑念なく，そのために，真気が体内に形成し，自然的に正常な経路にそって流れる），と記されている。そうすると，「陰陽応象大論」に「上古聖人，論理人形，列別蔵府，端絡経脈」*9（古代の聖人が人体の構造，内臓の位置及び経絡の配置を論述することができる）と記されている。要するに，経絡システムは古代の人が自然態で，あるいは修養によって認識し生み出したものである。いままで，この他に，経絡システムの形成について納得できる仮説は出てこない。

経絡システムのような人体に関する気の理論の下で，中医学は普通の経験医学から発展し，昇華してきた。今でも，現代医学とともに人々の健康や幸福に貢献している。中国のほかに，日本，韓国，アメリカなど世界のいろいろなところで中医学が活躍している。そして，中医学が現代医学と結合して，ホリスティックな医学を図って発展している。

しかし，人間に関する「気」の理論は中医学だけではない，人間本性に関する論述もたくさんあって，ここでは，省略する。そして，人間に関する気の理論は，古代中国のほとんどの分野に運用されている。

4. 古代中国の気の社会的運用

4-1 古代の気功—直接的な気の修練

直接的な気の修練は，古代ではいろいろな名前があり，例えば吐納・導引・行気・練気などである。それらは本質は同じなので，現在，統一的に気功と呼ばれることになっている。気功とは古代の人々が大自然の中で，順調に生きていくために，何千年を経過して生み出した心身鍛練の方法であり，生き方である。こういう経験が重ねられ，昇華されて，高いレベルに達した人がたくさん出てきて，そしてたくさんの貴重な文献が伝えられてきた。

例えば，『易経』『老子』『莊子』『淮南子』『太極図説』など，古代の哲学の經典であるが，その中にたくさんの気功の基本原則が含まれているので，気功の經典ともみなされている。そして，『黄帝内経』などの医学經典も同じように気功の經典とみされている。

純粹な気功理論だけの經典もたくさんある、『周易参同契』『悟真篇』『金丹四百字』『性命圭旨』など枚挙にいとまがないのである。

それで、その長い歴史の中に、たくさんの流派や方法が出てきた。それを大きく分けると、次のような五つの流派にまとめることができる。

医家気功：中国の医学者たちによって作られた気功である。主に病気の予防と治療、健康増進養生と長寿を目的にしている。

道家気功：老子、莊子の考え方(道家と道教)にもとづいた気功である。主に道教の修行者たちが不老長寿を願い、心身を鍛練するもので、無の境地に到達することを目的にしている。

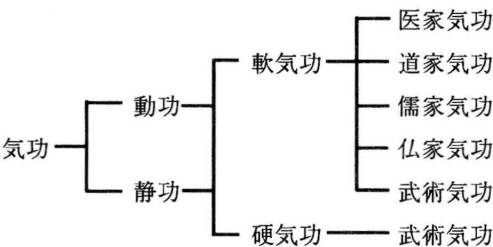
儒家気功：孔子とその弟子たちにはじまる気功である。人品徳性の向上に努め、やはり悟りの境地に到達することを目的にしている。

仏家気功：仏教の教えに基づいた気功である。禅に見られるように主に心の修練を行い煩悩からの解脱と悟りを目的にしている。

武術気功：武術に関係の深い気功である。主に身体を強健にして、敵から身を守ることを目的にしている。

流派については次のような分け方もある。医家気功・道家気功・儒家気功・仏家気功・武術気功の五つの流派は、「硬い気功」と「軟らかい気功」の二種類に大別される。硬い気功、つまり硬気功はおもに武術気功のことを指し、敵と戦うためのものである。軟らかい気功、すなわち軟気功は五つの流派すべてがおこなっているもので、太極拳はこの軟気功のひとつである。軟気功の主な目的は、健康長寿、潜在能力開発で、どの流派にも共通している*10。

基本的な鍛練方法から分類すれば、動功と静功がある。動功とは気の運行の規則によって作られる動作及び自発動作をしながら、心身を調整する気功方法である。静功とは動作をしないで主に精神及び内気を調整する気功方法である。



具体的な気の修練の方法は道家気功を例として見よう。ここでは、『中国の科学と文明』を生み出したジョセフ・ニーダムの研究を引用することにしたい。ニーダムが道家の修練方法を以下のように分類している。()の中は筆者の説明である。

- (1) 呼吸法(呼吸と内気の鍛練の方法)
- (2) 日光浴治療法
- (3) 導引の法(ニーダムが医療体操と呼んでいるが実は気功の動功である)
- (4) 性的技法(陰陽説の上に作られた性の技巧)
- (5) 「練丹」術および薬剤術(修練に役立つ薬品を作る技術)
- (6) 食餌法(修練に役立つ栄養剤)

これらの全技法は、「気」または天性を養うこと(養気, 養性)という集合名を使っていた。それらのうちのいくつかは確かにきわめて古くからあったと判断できる。というのは、『莊子』の中に、呼吸法にはっきりと敵意を示している一節があるからであり、『淮南子』においても同様であるが、他方、『道德経』はこの技法を推奨しているからである*¹¹。

古代の人々の直接的な気の修練が、人間の心身の健康、長寿、能力の開発及び人間と自然宇宙との関係、人間の生き方など豊富な成果をあげた、それは中国伝統文化の優秀な遺産である。

4-2 芸術——気の修養の一つの形式

古代中国の芸術は気を重視していた。芸術の具体的な技を訓練する前に、及びその芸術をしている過程の中に、気あるいは修身養性を大切にしている。

(1) 絵画における「気韻」説

中国の画壇で芸術としての絵画が正面きって論じられたのは、5～6世紀からのことである。謝赫(シャク)が「気韻」の説をとえ、それまでの顧凱之(コガイシ)などのいう「生氣(セキイ)」や「態」,「骨」などに優先するものとして主張した。書かれた人物の性格や態度が躍動しており,「気韻生動」でなければならないという。

唐代になると、こうした画論はいっそう格調の高いものとなり、人物画や鬼神を得意とした呉道子(コドウシ)、水墨画を創始した王維(オウイ)などが輩出した。

12世紀の宋代、郭若虚(カクジャクキョ)は『図画見聞誌』を著し、極端なほどに「気韻」説を展開し,「気」と芸術の関係を理論的に完成させた。

(2) 書道と気

中国の書道の誕生は漢字の創始から遅れること約2000年、4世紀になってからのことである。別の言い方をすれば、書道以前の字は、思想、意志を伝えるための実用的手段だったのである。それを詩文や絵画、音楽などとならぶ芸術の域にまで高めたのは、東晋の王羲之(ワキシ)である。「書聖」と呼ばれることもある王羲之は、それまでのいかにも固い隸書とはまったく異なる、生气はつらつとした字を書いた。彼が天師道(道教)の熱心な信者だったことと関係するかもしれない。しかし、王羲之は高いレベルの氣功の功力を持っていたようで、彼が字を書いたら、紙が置かれていたテーブルにも字が感ずるという伝説もある。

この他に、文章、音楽なども氣と緊密な関係がある

4-3 望氣——「氣」の軍事利用

中国の古代の人は敵と戦う前に、敵の雲氣を觀測することによって、敵の状況を把握して、自分の軍略を決めた。

墨家は戦国時代にあつて、やや特異な集団であり、その主張には博愛と非戦がある。その非戦という思想のために、『墨子』「迎敵祠」では、雲氣を軍事的に解釈している。「凡望氣有大將氣、有小將氣、有往氣、有來氣、有敗氣。能得明此者、可知成敗吉凶。」*¹²。(望氣には、大將の氣あり、小將であり、往氣あり、來氣あり、敗氣あり。これを明らかにすることを得る者は、成敗と吉凶を知る。)

客觀的に歴史を記述することで有名な『史記』にも望氣論がある。「天官書」は、天体や星占いについて述べているが、「雲氣について」の項があり、望氣の方法とその読み方を集約している。以下には、その一部を引用する。

「凡望雲氣、仰而望之、三四百里。平望、在桑榆上、千余里二千里。登高而望之、下屬地者三千里。」*¹³(雲氣を觀測するにあたっては、仰いで觀測すると三、四百里、平らに望むと西は千里から二千里、高地に上って眺めると、下方は地にふれて三千里。)

そして、雲氣と志氣の部分は興味ぶかい。「稍雲精白者、其將悍、其士怯。其大根而前絕遠者、當戰。青白、其前低者、戰勝。其前赤而仰者、戰不勝。」(ゆれ動く雲氣が青白いと、その下の將が勇敢だが、兵卒は噫病である。その根もとが大きくて前方に広がっているのは、戦っても互角であり、青白で前がひくい時は、戦いに勝つ。前が赤く上に向いている時は、戦っても勝つことはできない。) *¹⁴

4-4 風水——大地の「気」の経絡を測る「技術」

もともとの風水とは、「天の風」、「地の水」という。天地万物が一つの「気」からなるとする立場では、風は天の「気」の舞いであり、水はそれに応じる地の「気」である。人間が経絡システムを持っているように、大地も「天の風」と「地の水」の経路を持っている。国家を統治するにも、人体の健康を管理するにも、この風と水を深く研究することなくして、成功するはずがない。そのために、ある学者は風水を「宇宙の呼吸の局地的な流れと協同し調和するように、生者と死者の住み家を適応させる方法」とうまく定義している*¹⁵。

山の形や川の流れ、その方位などによって、家や墓の吉凶を判断する専門家が風水師と呼ばれる。風水説によれば、名山や霊山の頂上には龍神がおり、その龍神からは山のふもとに向かって、霊妙なひとすじの龍脈がくだるとする。その龍脈が平野部にでたところには必ず龍穴があるという。この龍を中心として家を建てたり、墓を作ったりすれば、人の富、健康、幸福に有利で、家は栄え、子孫は繁栄して、それに逆らうほど人に悪い作用を与えるということである。

各場所には、その場所に特有の地形上の特徴があり、これが自然の種類の「気」の局地的な影響を加減するのであった。丘の形や水脈の方向は、風や水に備わった、ものを塑造する影響力の結果であって、最も重要であった。これに加えて、建築物の高さと形状、道路や橋の方向が有力な要因であった。目に見えない気が、時時刻刻に天体の位置によって変化するから、当該の場所から見た景観について考えなければならなかったのである。

この風水の観念全体は疑いもなく非常に古い時代のものであり、『史記』は風水師階級の存在することを記述している。風水師の理論的な根拠は陰陽五行学説である。羅盤——磁気羅針儀は風水の目的に開発された道具である*¹⁶。

以上に述べた望気と風水は、古代の人々の気に対する探索とその運用だったのである。風水は今だに中国、日本などの国に見られている。しかし、こういう方術を、古代からも批判する人がいる。現代中国の正統思想からは、こういう思想内容は迷信とされている。

5. 気の本質——中国古代哲学的思考

以上に述べてきた「気」に関わるいくつかの観点及び運用が、すばらしいか、あるいは迷信、古くさいか、その説の是非はともかく、それは古代中国人の人間、自然及び世

界に対する思考であり、探索である。以下では、気の本質を反映している主な哲学思想を述べる。

5-1 気に関する哲学思想

(1) 気一元論あるいは精気学説

精気学説は、もともとは道家が提出した理論であり、世界の起源や統一性を解明するのに用いられたのである。道家の創始者、老子は「道」を世界の核心、それは物質世界が形成される以前にすでに存在しており、世界の万物はすべて「道」を起源とすると認識した。『莊子』は、世界の万物は「気」を起源としているとし、「道」を「気」と解釈した。『莊子』『公羊伝』は、また「元気」を天地の始めと為すと提言した。戦国末期になると伊文らがまた「精気」の概念を述べた。彼らは、「精気」は気の純粋な部分であるといいこれは万物の本源であるとした、並びに明確に「道」を「気」と解釈した。「気」は客観世界の本体であり、それが無いところがないのだ、とした。この世のあらゆる形の物体のすべては「気」によって構成されている。「精気」は、またいかなる生命物質であってもかくべからざるものであり、人体も同様に「精気」によって結合し成立している。「精気」の流れの変化は生命現象、精神意識、そして思惟活動を生み出す。つまり、このように精気学説は、実際には春秋末期の老子に始まったのであるが戦国末期には、すでに自己の理論体系を作り上げたのである。

(2) 陰陽五行学説

陰陽五行学説は最初には陰陽学説と五行学説が別々に発展してきたのである。

陰陽学説は、春秋時代にはすでに形成され、戦国時代に到ってまた一層の発展があった。「陰陽」概念の抽象化によって、広範囲に応用されるようになった。いかなる事物、あるいは現象もすべて「陰陽」二つの部分に分けることができた。すなわち、宇宙を形成している原始物質である「気」も「陰陽」二気に分けることができる。その清らかで軽いものは「陽」となり、上昇して天となる。その重く濁ったものは「陰」となり、下降して地となる。またさらに「陰陽」の対立と統一の関係、「陰陽」の運動変化の法則、「陰陽平衡」の概念を用いて、自然及び社会現象を理解した。「陰陽」は、そこで自然界の運動変化の根本法則となった。

自然界にあまねく存在している対立・統一の現象は、中国古代で早くも認識されていた。伝説の「伏羲氏八卦を制する」は、つまり対立・統一に対する普遍性の概括である。伝えられているところによると、「周の文王が八卦を述べ」、それを推し広めて六十四卦としそして『易経』を著わしたと。『易経』は「一」爻と「--」爻を用いて対立・統一の双

方を表現し、さらにそれを推し広めて多くの弁証法思想をその中に包含した。戦国時代に成立した『易伝』（十翼）は、「一」爻を直接「陽」と称し、「一―」爻を「陰」と称した。このように陰陽学説を「八卦」理論と合わせて一体とし、陰陽学説中の弁証法思想をさらに充実させ、陰陽学説をも、これによりさらに完全な哲学理論とした。

「五行」は、自然界の五種物質「金」「水」「木」「火」「土」の概念が抽象化され、その上「五行」の間の連係方式やその運動変化の属性をさらに強調して、理論的に発展してきたのである。「五行」の間の連係方式、すなわち「五行」の「相生」（相互促進）と「相勝」（相互勝つ）の関係である。「五行相勝」の概念の形成は比較的早く、『墨子』にすでに「五行に常勝なし」の言い方が見え、「五行相勝」の概念が早くも存在していたことを証明している。ただし、「相勝」は固定された順序があったかどうかは論争がある。「五行相勝」の順序は、およそ戦国後期の鄒衍（BC340～BC260年）になって確定した。「五行相生」の順序に関しては、先秦諸子の著作では、まだ言及されてなかった、ただ「五行」と「五時」の配当の順序から見てくると、戦国時代にはすでに形成されていたのかもしれない*17。

さらに、鄒衍は精気学説の基礎の上に、精気学説、陰陽学説と五行学説の三者を合わせて一体となし、系統化し、しかも「陰陽五行学説」を形成させ、一つの独立した理論体系を確立したのである。鄒衍は、このような「陰陽五行学説」を用いながら、当時の農事暦の根拠となる四季の推移（自然、天）と治世（人為、人）の関係について、大胆に立論し、予測して、当時の社会に大きな影響を与えた。

（3）「天人合一論」あるいは整体調和論

「天人合一論」は整体観と調和論からなっている。整体観とは一つの意味は人間が一つの整体であり、システムであり、心と体のサブシステムがあって、しかも有機的な一つのシステムになっている。もう一つの意味は、人間と社会と自然は、一つの全体の中に存在している。人間は宇宙の一部である、しかも人間と宇宙の構造は相似しており、人間は宇宙の一つの縮図であり、すなわち「天人相應」である。そして宇宙の変化と人間の変化が同じか、あるいは類似するか法則性を持っていることであり、すなわち「天人同理」である。

それで調和論は、人間と宇宙が一つの全体の中に存在しているから、宇宙が一定の法則によって運動しているため、人間も相應な法則にしたがって活動すべきである、そして、こういう過程の中に、人間の自身の調和、社会の調和、自然の調和及びお互いの全体の調和を実現する、というものである。この整体調和論が、前に述べたように医学の

方に応用されていた。そして、整体調和論を1年12カ月の年事暦として整理したのが『礼記』月令篇である。そこでは、1)その月の太陽・星の位置、2)陰陽五行説に基づいた日・神・動物・音・数・味・祭祀などのその月への配当、3)その月に現れる自然現象や動植物の活動、4)以上の自然に対応する人事——皇帝の起居、飲食、衣服、道具、5)儀礼、政務、法令、農事、などを記し、最後に6)その月の自然のあり方に背いた政治を行うと天変地異が生じる、と結ばれる。このような時間軸に沿った「天人合一論」を「時令」という。「時」はそこでは「天」または「天の時」のことであり、「令」は、法令・禁令・儀礼・祭祀・政務など「人」事の総称であって、天・人間の調和ないし同調が求められている*18。「天人合一論」を最も体系的に説いたのは漢代の董仲舒であった。しかし、彼は天を上帝という意志ある神と見るから、彼は「君権神授」の唱える者であった。

5-2 気の思想の発展

これまでに述べてきた気の人間観や気の社会的な運用、及び気に関する哲学思想を見比べると、やはりこういう気の思想は中国思想の最大の特徴であろう。そこで、こういう中国的な気の思想の本質を見極めるために、中国思想の発展、完成の流れを概略的に見る必要がある。

そのために、中国の歴史を伝統文化の核心である哲学思想の視点から見ると、以下のように4つの段階に分けて見ることができる。第一の春秋戦国時代は、中国思想の萌芽期で、方向が確定された時期である。その後の中国思想の萌芽である、儒家、道家、法家、墨家、陰陽家、農家、兵家、名家、雑家などが、ほとんどこの時期に出てきたのである。第二の秦漢時代は、中国思想が統合されてきた時代である。漢代に(B C 2 ~ 3 世紀) 国教的地位を得たが、これに対して後漢末期から、太平道や五斗米道の農民反乱が起こった。道教の起源はここにある。この時期に、仏教も伝来してきた。この儒教道教仏教三者の対抗——交流関係が、その後の中国思想史の基本的パターンになってゆく。第三の南北朝時代から唐代(4 ~ 10世紀)にかけての時代は、西洋文明との交流がさかんになった特異な時期である。宗教・芸術・技術などに文明の面からみると、儒教よりも仏教と道教の方が大きな力を示している。これにともなって、儒・道・仏の三教交流の時代が訪れた。第四の宋代以降は、儒教哲学が再び知識人世界の中心を占め、道教と仏教は政治的社会的にその下におかれるようになった。そして民衆の信仰は、この三者が渾然として一体になった性格を帯びていた。

ここまで見てきた気に関する思想も、ほとんど春秋戦国時代から秦漢時代にかけて、形成され、発展してきたのである。その後の歴史の中で、およそその確定された方向に発展し、体系化していた。ここで宋明理気学を例として説明しよう。朱子(1130～1200)と王陽明(1472～1528)に代表される宋明代の理気学は、儒教的伝統に立った哲学的思考の完成された姿をしめしている。「気」については、「理」という概念と一緒に、一つの思想システムの中に取り入れて、論述されている。例えば、朱子は「天地之間、有理有気。理也者、形而上之道也、生物之本也。気也者、形而下之器也、生物之具也。」(『答黄道夫』)*¹⁹(天地の間に、理ありて、気あり。理とは、形而上の道なり、生物の本なり。気とは、形而下の器なり、生物の具なり。)しかし、「天下未有无理之気、亦未有无気之理。」(『朱子語類』巻1)*²⁰(天地の間に、理のない気がない、気のない理もない。)そして、理は人にあつては「徳性」であり、それを修養し、十分に発揮するよう呼びかけている。

孔子と孟子に代表される初期儒教には、理論的に明確な形にまで体系化された自然観や人間観はなかった。したがって西洋古代哲学史にみられるような形而上学(存在論)のような理論体系を欠いていた。しかし理気哲学は初期儒教と同じように基本には易の思考に由来するところが認められる。そして理気哲学は陰陽五行学説を宇宙観の基本的パラダイムとして受けついでいる。これは初期儒教が拒否した陰陽家の理論であるが、易の哲学のコメンタリーである「十翼」が自然と人間の関係に注目していることが多いという点を注意すべきである。その点は、やはり儒教が道教と仏教から影響を受けたところである。そしてこの他に、仏教の経験を超えた超越の次元に関する思考、及び実践的側面としての道教と仏教の修行法なども受け入れたのである。こうした気の実思想は清代まで伝えられた*²¹。

気の実思想をこのように見てくると、古代中国人の行動方式の二つの特徴も見えてきたのであろう。その一つは、修養を重要視することである。修養は自己自身の内面にかかわる修養と、自己の外に向かう倫理的修養という二つ種類の修養がある。古代の気功、瞑想の訓練は前者の代表的なものであり、それは心理・生理的实践であり、自分自身と宇宙との直接的な同一化の努力である。これに対して、後者は家族や地域共同体の人間の連帯、政治の場における道德の修養である。もう一つは、実践を重要視することである。社会的実践に必要な限度を超えて思考をおしすすめようとする分析的理性に対して、古代中国人はあまり興味がない。「天人合一論」の整体観念の傾向と修養の行動方式を重要視することが、その考えられる原因であらう。こうした修養と実践を重要視する行動

方式があるために、古代中国に燦爛な文化が輝いたが、それも解剖学などの科学が発展することができなかった要因の一つであろう。

6. おわりに

以上のように、気という切り口で、中国思想をきわめて概略的に見てきた。気は中国思想のほとんどの方面にかかわっている。中国の個体レベルの人間観から、社会的なレベルの運用や政治、哲学思想などまでを、同じ核心的なものである気の思想が貫いている。こういう気の思想は、中国伝統文化を理解するうえで、非常に重要である。そして、ここでは、以下のようないくつかの点を強調しておきたいのである。

まず、中国の気の思想の形成が中国の半閉鎖大陸の地理環境、「農業を本とする」経済構造、及びその基礎の上に建てられる封建宗法の政治制度に繋がっているという点である。気の思想がこのような環境の中に形成され、そしてそれと同時にその環境に反作用している。こういう相互作用の中に中国伝統文化を把握することは、妥当であろう。そうすると、周期性動乱がありながら超安定的になっていた中国封建社会が、どのように形成されたか、なぜなかなか封建社会から近代社会に入らなかったのか、ということが見えてくるであろう。

次に、気の思想は、あくまでも中国古代の思想である。中国伝統文化が近代になり、西洋文化の衝撃を受けてその下におかれるようになった。現在の世界は西洋文化を核とする工業社会の時代になっている。これは人類文化の交流、発展の法則であろう。しかし、文化現象の中に、伝統文化と文化伝統とは違う、伝統文化とは、古代に存在した文化例えば唐代の文化や清代の文化であり、文化伝統とは、ある文化例えば中国文化や日本文化が形成されてから、変化、発展しながら、続けて伝えられている、その文化の核心的なものである。現代になり、その文化伝統も必ず存続している。1980年代の中国の気功ブームがまさしく中国の気の文化伝統の現れである。そうすると、「気」で中国の社会現象を見るということは、中国社会の本質を見通す時に、一つの役に立つ方法になるのであろう。

第三に気功についての思考。気功が一種の健康法として、多くの人々に受け入れられている。それは、気功で病気を治すだけではなく、最も重視することは、病気になる前にそれを防ぐことである。つまり、生理、心理、生活習慣ひいては人生目標など生活方を調整しながら生きていく健康法である。そして、経絡システムとか、耳で字を「読む」とか現代科学が理解できない現象が研究されている。このような人間に対する認識

を現代生命科学がどのように受け入れるのか、あるいはどのような新しい科学の枠組みが必要であるのか*22。現在、中、米、日などの国の研究機構はこういう研究をしている。その点には、注目すべきである。さらに工業社会の発展につれて、核兵器問題、環境問題など人類の生存に関わる大きな問題に直面させられている。このような問題を解決するために、気思想の人間、社会及び自然との関係に関する思考を見直す必要もあるであろう。

最後には、上述した気伝統の中の価値がある部分を評価し推進する時、そのマイナス部分に注意をはらわなければならない。特に、八億の農民の存在、近代化の課題をまだ完成しない中国にとって、「君権神授」の思想、迷信にたよる傾向、分析理性を軽視する欠点などのマイナス部分を抑止しなければならない。先進国を追いかけて、富強、文明、民主を目標として努力している中国は、どのように西洋文明を取り入れながら、伝統の活力も蘇らせて、正しい方向に発展していくであろうか。社会主義か資本主義かといった単純な二元論的な時代はもう終わった、新しい時代にマッチした、より多様な価値観を包摂しうるようなシステムを模索していくべきであろう。

注

- * 1. 伍紹祖「在全国健身氣功管理工作會議上的講話」『中国氣功科学研究会会刊』、第112期、1997年8月、P 1.
- * 2. 湯浅泰雄『気とは何か』日本放送出版協会、1991、P 30で、この部分の詳し分析をなされている。
- * 3. 佐藤喜代治『一語の辞典「気」』三省堂、1996、P 5.
- * 4. 朱宗元ら著、中村璋八ら訳『陰陽五行学説入門』谷口書店、1990、P 26.
- * 5. 湯浅泰雄『気とは何か——人体が発するエネルギー』日本放送出版協会、1991、P 38.
- * 6. 朱宗元ら著、中村璋八ら訳『陰陽五行学説入門』谷口書店、1990、P 27.
- * 7. 常石敬一訳・解説『ヒポクラテスの西洋医学序説』（小学館、1996）によると古代西洋医学もホリスティックな医学が言える。しかし、それは別の体系の医学である。
- * 8. 方春陽等編『中国氣功大全』吉林科学技術出版社、1989、P 117.
- * 9. 方春陽等編『中国氣功大全』吉林科学技術出版社、1989、P 123.
- * 10. 于永昌著『生命力をひきだす医家氣功』白揚社、1993、P 18.

- *11. ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』思索社, 1975, 第2巻 P 176.
- *12. 墨子著, 塚本哲三編『墨子』有朋堂, 1920, P 132.
- *13. 司馬遷『史記』中華書局, 1959, 卷27, P 1336.
- *14. 司馬遷『史記』中華書局, 1959, 卷27, P 1337.
- *15. ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』思索社, 1975, 第3巻 P 401 .
- *16. ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』思索社 1975, 第3巻 P 403 .
- *17. 朱宗元ら著, 中村璋八ら訳『陰陽五行学説入門』谷口書店, 1991, P 17.
- *18. 梅原猛・後藤康男編著『東洋思想の知恵』PHP研究所, 1997, P 89.
- *19. 北京大学中国哲学研究室編『中国哲学史』中華書局, 1980, P 67.
- *20. 北京大学中国哲学研究室編『中国哲学史』中華書局, 1980, P 67.
- *21. 池上正治『「気」で読む中国思想』講談社, 1995, 『「気」の不思議』1991, が気
の思想について詳細な研究をなされている.
- *22. ユングの「集合的無意識」の仮説は, 中国古代哲学から大きな影響を受けたよう
である.